

父親の育児支援行動に関連する要因の分析

ナルセ タカシ アリモト アズサ
成瀬 昂* 有本 梓*
ワタイ イズミ ムラシマ サチヨ
渡井いずみ* 村嶋 幸代*

目的 少子化の進む日本では、健やか親子21などの政策により父親の育児参加が推奨されている。父親の育児参加に関する研究では仕事の影響を考慮する必要があるが、仕事と家庭における役割の関係性（スピルオーバー）が父親の育児参加にどのように影響するのかは、明確にされていない。本研究では、父親の育児参加を育児支援行動と定義して、その関連要因を検討し、父親の育児支援行動と役割間のポジティブスピルオーバーとの関連を明らかにすることを目的とした。

方法 A市内の公立保育園17園と私立保育園14園に通う、1, 2歳児クラスの父親880人を対象に、無記名自記式質問紙による留め置き・郵送調査を行った。父親・家庭・多重役割に関する変数を独立変数とし、「母親への情緒的支援行動」、「育児家事行動」を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。父親に関する要因、母親の職業を独立変数として投入した後（モデル1）、さらに仕事と家庭の両役割間のポジティブスピルオーバーを追加投入（モデル2）した。

結果 189人の有効回答を得た（有効回答率21.4%）。重回帰分析の結果、母親への情緒的支援行動の実施にはポジティブスピルオーバーの高さ、平等主義的性役割態度の高さが有意に関連していた。育児家事行動の実施にはポジティブスピルオーバーの高さ、母親が会社員・公務員であることが有意に関連していた。

結論 父親の育児支援行動は、父親の持つ特性や経験などの背景要因よりも、仕事と家庭の両立におけるポジティブスピルオーバーとの関連性が強かった。また、ポジティブスピルオーバーが高いほど母親への情緒的支援行動、育児家事行動を行っていた。父親の育児支援行動を促進するための働きかけや政策を検討するためには、父親が仕事と家庭をどのように両立しているか、それによる影響を本人がどう捉えているかを考慮する必要性が示された。

Key words : 父親, 育児参加, 共働き, ポジティブスピルオーバー

* 東京大学大学院医学系研究科地域看護学教室
連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院医学系研究科地域看護学教室
成瀬 昂